

優秀賞

心のアンテナ

八尾市立南高安中学校 三年 内藤 理乃（ないうら）

小学校の入学式、新しいクラスの新しい教室に入って私は驚いた。知っている友達誰もいなかった。同じ保育園から十二人いた友達の中で、私一人だけが真っ白になった。四十人の教室の中に顔も名前も何も知らない子ばかりの数日間、帰宅しても私は父や母に学校での出来事を話すことができないくらい覚えていなかった。それだけ毎日が緊張の連続だった。

五月の日曜参観日、母が参観に来てくれた。家に帰って母が「知り合いのお母さんが誰もいないクラスだから緊張したわ。でも、どこかのお母さんに『理乃ちゃん、うちの子と仲良くしてくれてありがとうございませう』とお礼を言われたわ」と喜んでい

た。いつも一人でいた私に「友達になれへん？」と声をかけ、仲良くしてくれていた子のお母さんだったようだ。その頃になると私にはたくさん友達ができていた。毎年クラス替えがあるたびにあの緊張が私の心に沸いてきたけれど、私は「みんな同じ気持ちなんだ」と思うようにして自分から話しかけるように努力した。

そして四年生の秋、突然母が私に向かって言った。「その指の爪、どうしたん？」

私の手の爪はすべてなくなっていた。私が無意識に「爪噛み」をしていたのだ。特にひどかったのは薬指で、噛むところがなくなった爪の先から血が出るほどだった。母が

「何か悩み事とかあるんちゃうの？」

と言ったが、ピンとこなかった。どうして悩み事があると爪を噛むのかわからなかった。しかし、私の心の中にモヤモヤした気持ちがあったのは確かだった。その頃、私はクラスでよく一人になっていた。仲良しの友達と話していても、ある子がその友達を奪うように連れて行き、私は一人で学校生活を過ごしていた。学校の行き帰りも一人だった。でも私は

それが「いじめられている」と思っていなかった。なんとなく毎日がつまらないだけで、そんなものだと思っていた。家では四歳下の弟に手がかかるし、私は働いている母の手伝いをしていた。ただ学校に行く日の朝になると心がモヤモヤしたのは確かだった。「また一人にされるのかな」と頭をよぎるのだ。私はそんな思いを母に相談した。母は私の話を聞いてくれ、血の出ている指の手当てをしてくれた。今でも私の薬指の爪の形はおかしいけれど、母は「お母ちゃんの爪の形にそっくりや」と言ってくれる。その後、母が担任の先生と話をしたらしく、先生は私を一人ぼっちにしようとしていた子と話をしてくれた。その子から手紙をもらった記憶はあるが、何より母に気付いてもらい、自分の気持ちを吐き出しただけで、私の心のモヤモヤは、なくなっていた。いつの間にか私の爪も伸びてきた。

小学校一年生のあの緊張した毎日と、四年生の出来事が今の私の人間関係作りにとっても役立っている。誰かが一人でつまらなさそうにしていたら声をかける。相手の嫌がる発言や行動はしない。そして何より、相手の話をしっかりと聞いてあげ、相手の思い

に寄り添ってあげられる事が大事だと思う。相手の心配で不安な気持ちに気付いてあげられる心のアンテナを持つことも大事にしている。一年生の時、一人でつまらなさそうにしていた私に声をかけてくれた友達は今も私の親友だ。嬉しい事、悲しい事、いつも共有することが出来る。四年生の時、私の爪に気付いてくれた母は私の心強い味方だ。困ったことはいつも相談している。私の小さな経験はともじやないが世界を変える事はできない。しかし、差し出された手に助けられた私は、大人になってもきっと誰かに手を差し出すことができる。

辛く、悲しい事があったとしても、必ずあなたの声に耳をかたむけてくれる人がいるはずです。あなた自身がその辛さに気付かなくても、その表情や行動に気付いてくれる味方がいます。私たちは決して一人ではないのだから。